



三從心得尊後編

下

9
3457
4



3457  
4

藏書

鳥上

下之巻 目錄

- 一 鳥の上と雀と中よしの不相持の事 初丁
- 一 若ひ時の色まより色情入りりとの事 四丁
- 一 金と女をわつうのたぢろかぬ人の事 七丁
- 一 女の貴賤をあらわす欲する人小随ふとの事 八丁
- 一 西院の河原平藏が娘林大膽大敵の事 十三
- 一 好ふやうといふ横道者の事又色とり字の講擇 十六
- 一 此世ふこゝの代物恐ろしい鬼ありとの事 十九
- 一 一言も中の町ぢ。大のらとふんごまふ 二十
- 一 排縮緬虎の皮より恐ろしやといふ狂哥の事 廿一

おとんか

工

三巻の目録二編六

- 一 ひとりぬしの毒ふ。あててくまう。金と失ひ鼻と失ひ入の夏 廿二
- 一 孔子徳を好む事。色と好むがごとき者とえずといひあふ夏廿四
- 一 廿より三十四五入至る迄折くろるの思案物との夏廿七
- 一 老人心得の事 奇なり 廿八
- 一 正直ふかぜく者ハ。世界第一の寶といふ事 廿九
- 一 男ハ女ふむかごとかハ男ふむろくごとく世と渡る事 三十四
- 一 三馬ハ一夜の中ハ志こたま金をひろふ事 三十六
- 一 深川の木場ふ於く。大金を釣上り人の事 四十
- 一 後漢の郭巨黄金の釜を布り出せし事 四十二
- 一 女中奉公ハ出く御主人ハ仕へる心得の事 四十六

主従心得草 後編下

○日本惣風土記八十四神地名録ふいろう。武列葛飾郡下  
 千葉村清瀧山正王寺ハ真言宗ふまろく。閑山ハ祥うあろす。  
 本尊ハ阿彌陀佛。御朱印五石ハもと由緒未とまど。此寺の境  
 内ハ大樹數多ハ川く。間近く鴻の巢を啄くふかけく。雛も  
 見へり。下枝ハ雀めかすく止りて雀の巢もすく見へり  
 是を不思後ハ思ひ鴻の巢の近所ハ雀のすきハハカガの事と。  
 任僧ハ尋孫ハ任僧のいろう。雀ハよく鴻の羽虫を取由へ  
 入。鴻ハよるこびて雀とハ中能也。又鴻の巢ハハ蟻のつまる  
 物ふまろく。鴻の雛ふんぎするハ入。鴻より雀めを頼めて蟻の

武列下千葉村正王寺入松の大和  
ひまこひつゝ、鶴の巣をまかひく  
ころり又下多とよ雀の巣あり、ころり  
とらふひのちあり



ふんぎをふせぎ。又雀の巢へハ蛇の子を取来入る。雀ハ鴻  
を頼て。蛇のふんぎをふせぐなり。故ハ又かけのごとく。  
雀の巢のまのこあひて。よふ頼と頼まはさく。鴻と雀ハ甚ど眩  
鋪者也との事。僕初く此事を聞かぬ。鳥獸といへども。  
天性自然の能不能あり。形ちある者ハ必あり必ある者ハ智の  
り愚あり。能不能も又各別なまて。各々其得る所あり。鴻ハ  
形ち大ひある者ハ必く小あるありを防ぐ事あり。よふまて。  
雀を頼て是を防ぎ。雀ハ形ち小ある者ハ必く蛇を防ぐ事あり。  
よふ。鴻を頼て是を防ぐ。能を以て不能を助けぬハ感ず  
ばき事也とあり。人間もかくありたき物なまて。吾角我慢ふ

志て我身勝を致す。人と不和とあり。怨敵のごとく。又我  
かまざる事ハより。人のする事ハ忌嫌と思ふ。くせあり。大ひふ  
る所やまより也。くがする事ハよきと交わり。あしき事あり。又  
人のする交ふもよき事あり。あしき交わり。皆一得一失なま  
る。人間の力及びごとく。ことよよ以て。能ハ不能を助け不  
能ハ能を頼て。災難を直ま一生安かみらすべし。よひふ頼  
と頼まはさく。い不相持ふまをば。鳥類畜類でさへい不相持よ  
志てよひふ安かみらす。況や人とまはさく。い不相持のなる  
きハ鳥ふたも。志るざる益けんや  
○若き時の所中まより。よく色情ふあり。是を急度慎む

登し。一切の所やまより是より起る。若き時辛抱せざるは老  
 後大おんざり。若し時辛抱せざるを。出世も公安く  
 来るけしき。年寄ては出世も出来ず。金限もりのみかぬと  
 あるべし。すなわち事不事皆左まへとある。又若し時辛抱すま  
 を年寄不と段く仕合よくふり。金限もよくふりて。大  
 福長者とある也。若き時辛抱せず。ごうらくすま老  
 後辛抱まよくかせぐま。万事間遠ひまよくふりて。福德ハ  
 まよく下安をもふし。是より何れ若き時辛抱せてかせが  
 孫を。役立ぬとあるべし。渡世肝要記にいり。人ハ四十内ハ  
 随分と精を出して金限をいよくふり。早る五十五成てハ氣根

ちとろへく。若き時と大ひま遠くも者也。若き時儲けて置孫を。  
 役立ぬがごとく。子後の澤山ある者ハ。よめ取むこ取我身の入用  
 一ハ孫者の愁ひ脱びふりて不慮の物入りの事ふまを。若し若  
 ひ内ハ立身出世をまよく。金限を溜置孫を。役立ぬとあり。是  
 小相違ふ。又若し内ハ辛抱まよく少く宛ありま。溜る人ハ。年  
 寄不と段くと福德の来る人ハ。老後ハ金持とある人ハ。又  
 若し時辛抱せまよく。少くても。借金まこつらへる人ハ。年  
 寄不と段く貪まとある人ハ。考へらる登し。是もよく色欲  
 のり。身ままよくする事ハ。若し内ハ急度色欲まをばむ  
 登し。是色欲の大ひある災いとあるとあり。證拠ハ周の幽王ハ

麤妙が爲入天下を失ひ惡名をのこす。吳王夫差入西施の色  
 小迷ひく。國を亡ぼし玄宗皇帝ハ智仁勇の不まをありし  
 人ふも去揚貴妃の色小迷ひくより大ひは庸君とふり。天  
 下を乱し末世の笑ひ草とありあり。又日本の清盛のひけむ  
 志やも常盤の色小迷ひく三人の子を助け非なる。如の  
 けんぞくを西海の波よ志げぬ。天下を亡ぼしたる。さしも勇  
 猛の義貞も内侍の色小迷ひて月夜酒色よおぼき出陣の公ふ  
 一。是ふよのりく一族皆亡びたり。是皆色小迷ひ一のやまり也。  
 其外大名高家小色よ迷ひく。大國を失ひ一入のあけてかごへ  
 がご。以やまより以下の者ハこふらむんふ不ろぶとまらざし。

慎むべきの事一ふり

〇恐るる。色と酒との測小身をまげむと志けてまらる者也  
 〇夏の虫身をわくづらふふす事也。深く迷ふよつてふりゆり  
 石田先生とのいろは短奇ふ。こゝいをけ物何おやと思ふ。色と  
 短氣と。うそとさけ。とあり是等の歌をよくかんがへて。色よ  
 迷ふのあやまちまよくささるべし。一たびかへりんを城を  
 かさぶけ。二たびかへりんを國を傾け。三度顧りえんを身を  
 失ふと入。古人の堅誠也。夏の虫の火入かごとし。物小着きて  
 一身を失ふ。夫人間の万物の長とまら。智も又勝たり。あ  
 小色よ迷ひく。身を失ふ。夏の虫ふなとまら。万物の長と入

いひがごとし。万物の下々の下とりぬ。夏の虫のつゝ下あるべし。  
 一念の迷ひより。本心の明德を失ひ。智恵の鏡より。我身を  
 火小こがし。水みぢぐり。かふり。きき事。よひく。むや。若色欲  
 の心起らむ。我身を。不ろ。不す。心起りたる。と。若川。て。深く。恐  
 まる。急度。停止。す。ぬ。  
 ○命を。取。も。捨。る。も。色。の。道。え。入。り。又。き。の。た。ま。ご。と。か。し。  
 ○孝行。天皇。君。を。ふ。ふ。迷。ひ。た。る。色。の。道。の。綱。さ。げ。る。も。已。か。悪。性  
 ○了。簡。詞。書。い。い。く。金。と。女。を。預。か。り。て。も。た。ち。ろ。う。ぬ。人。で。ふ。く  
 て。ハ。誠。の。よ。い。人。と。い。ひ。が。し。古。社。今。来。ふ。迷。ひ。安。き。ハ。心。の。力  
 二道也。儒佛神の教へふも。対更。い。ま。い。り。め。あ。へ。り。其。内。ふ。も。

欲心。た。ま。ご。の。道。も。あ。げ。と。共。色。道。ふ。の。迷。入。人。多。し。名。將  
 勇士。又。子。等。も。皆。是。より。敗。と。取。入。り。況。や。其。外。の。取。入。も  
 豈。ぬ。者。其。の。猶。く。あ。や。ま。り。多。し。何。卒。金。と。女。と。を。預。り。て。も。た  
 ち。ろ。う。ぬ。か。う。ぬ。人。と。あ。る。也。是。を。誠。の。正。直。人。と。い。ふ。早。く。世  
 えて。福。徳。圓。満。の。人。と。あ。る。事。眼。前。也。併。し。左。様。ふ。人。入。至。く。希。也  
 今。の。世。入。金。と。女。を。預。り。て。正。直。の。番。を。ま。る。居。入。の。一。人。も。あ。し  
 金。を。預。け。を。き。ひ。こ。し。女。を。預。け。を。く。ら。り。へ。ま。る。を。し  
 こ。む。皆。人。が。金。と。女。入。目。も。ふ。し。智。恵。も。ふ。し。正。直。入。猶。ふ。し。皆  
 盗。人。狼。狂。の。狼。者。を。か。り。也。由。し。油。断。す。べ。か。ら。む。若。今。限。か。ら  
 め。ら。む。金。だ。ん。と。入。め。と。く。土。藏。の。角。と。置。ぬ。し。若。女。が。あ。ら



を。脚本へ加川つけてをかさぬやうにすまじし。成しでも放すと  
災ひあり。金と女を預けたら。楯もかつ不ぶし。扱もやき煎  
を預けとやうな者もて。いつまじさずみてかへさぬとあるべし  
急度氣を舟く。堅く御用心く

○白氏文集に古塚の扱ふよせく。艶色をいまりめたり。其内の  
向ふ古塚の扱女く。婦人と成顔色美扱の女も扱る。害猶浅  
一朝夕夕人の眼を迷らす女の扱の媚をふす。害却て深し  
眼も増月も長下て。人の心をなぶらすといへり。此を古塚の扱女  
く。婦人と成顔色甚くくし。亦と古塚の女も扱て人な  
迷らす。害猶浅し。唯らうのいと人の目を迷らすをかりふ老て

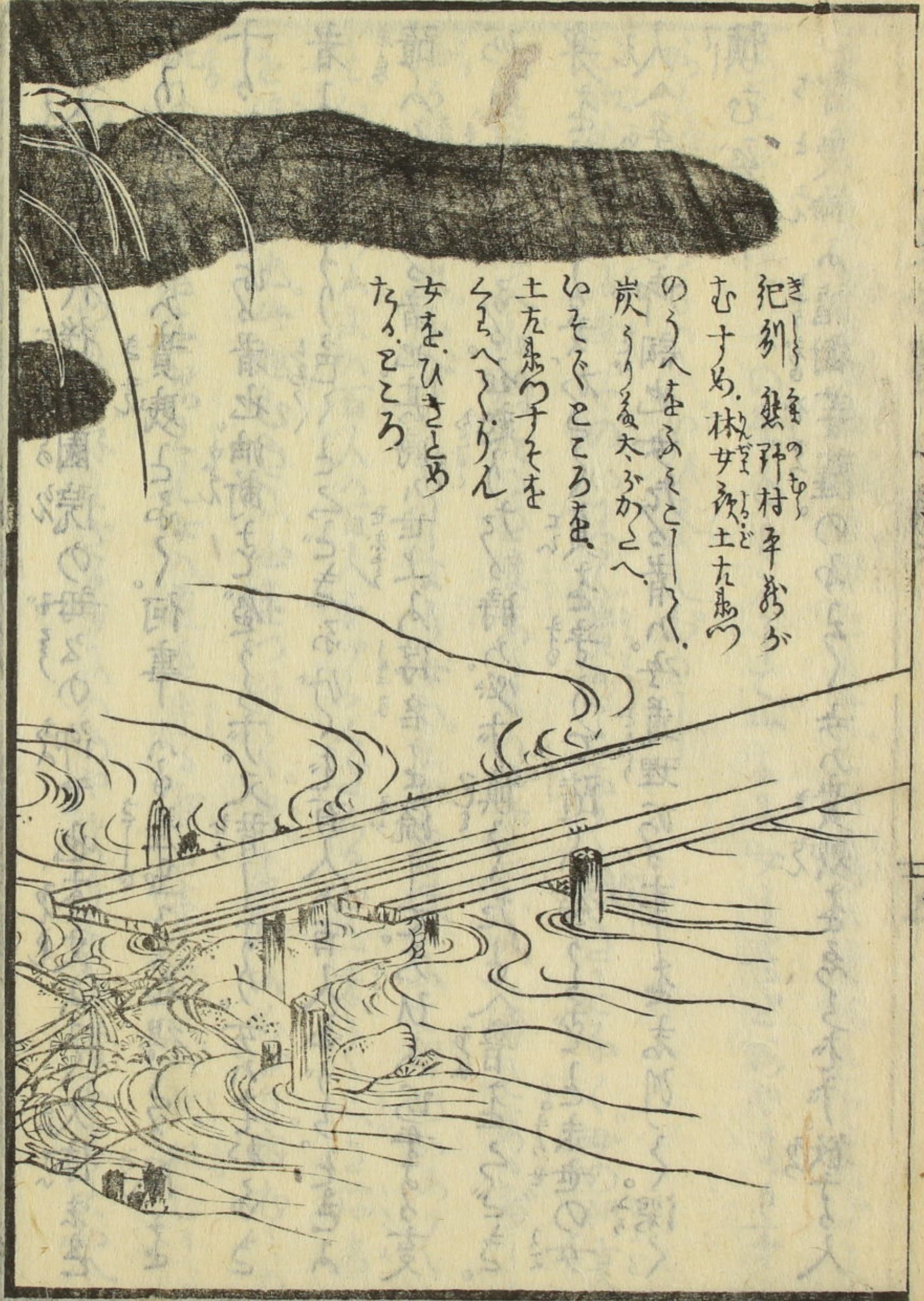
甚扱ふ障りとあらず。女の媚笑ふも迷ふのと。甚災ひ甚くふか  
く老て本心を失ひ。一生をばやまのりて。食食難儀をする也。老て  
後十万余め更甚かいか。女の媚をふすとらふらる。じ  
き姿をふして。人よえせる事也。男をよらることをせく。男の思ひを  
かけるやうに老て。男を迷らす事也。女の嬉と老く。男よの  
女老やと男をよらる。こぶ也。况や男が心をかけて拜む頼むとい  
へ。甚くよらる。こぶ事也。文選に士ひの己をある者の為不用  
ひら。女己を悦ぶ者の為小取らる。他るといへり。女己を  
老よの女老や。うつく老の女老やと。慕慕ふ者の為。猶く姿を  
扱ひ其人の悦ぶやうにするの。男の深く思ひ舟やうにする事也。





狂心得二編下

下



紀伊 熊野村 平井が  
 むすめ 柳女 夜土左馬の  
 のうへをふまこし  
 炭より多太かかへ  
 いそぐところを  
 土左馬の子を  
 くらへり  
 女をひきこめ  
 たるところ

三ノ巻 二ノ巻

三行の御 二編下  
み随ふとあり。是も相違ふ。ある女のいづく何様の賤志い  
人でも見ふとい男でも。我を慕ふ者あるを。あつて思ひ  
まみ随ふの氣あるといへり。然るに女の貴賤をあるを。欲す  
る方み随ふは相違ふ。是の女の悪性也。不貞不義といふべし  
たとへ急まゝ人ありといへ。甚人甚道ありとさる。かゝく  
貞を守り。心をうごかす。是の女第一のたゝみ也。  
女も貞のつとへあるを。女の一人の立者也。若く不貞不義  
するといふ。こゝまたたゞ女のまたり者也。急度たりとみ  
男の上流を好む。女の下流を好む事。悟忘漫筆 後編上 五十二  
委しけき。人情を悟る。入用也。閨門をよく

治め男女の淫訟を交する者。あるを。あつて思ひ  
○女の貴賤上下を撰む。欲する者。み従ふ。相違ふ。又下流  
を好む。相違ふ。又女の悪事。み智慧あり。あつて思ひ  
是も唐日本をかり。あつて思ひ。天竺の女も。あつて思ひ  
り。其の志あり。この智度論十四卷十八。國王經。みいづく。王女あり  
拘牟頭といふ。其の志あり。魚師あり。林波伽といふ。魚賣あり。  
時王女の。高樓あり。在を窓の内より見る。紅顔羨羅桃李の粧ひ  
を。見る。み中。下賤の人。と思ふ。天人といへ。あつて思ひ  
是を。想像。染着。あつて思ひ。日月を。見る。み  
随ひて。益々思ひ深し。後。あつて思ひ。病ひ。あつて思ひ。飲食する事

由はつことず。段くと疲ふところへ二重の帯が三重ふまはり。三重の  
 帯が四重ふまはり。さうふり。既ふ命もあさうきふとふり。  
 母ハ病ひのやうすをえらふ何う合意の由かぬ煩ひを。奉の  
 次方を尋ねるふかのむきとらへさうり。さういつぞや王女を見  
 るより。哀ふことがきて。公に忘るひまふり。母を煩ふふり。と  
 りふ。亦もさ王女の奉ふまを所詮叶ひがごとく。かき死ふ死  
 するより外ふし。さう高位高官ふあつむ仕接模様もあつむけ  
 さまさうふも。下賤の身ふまを頼るの綱もふり。とらふり  
 志ふまかへ川て泣かふ志む母親も。是を聞ていさぐはさふ  
 思ひ。さとしていさぐ。汝ト甚様ふ男ふあつむ。さう一の奇略をめぐ

ら一汝トが志しを姫へ通さうくんと。母ハまより。ゆづるを求  
 め王の宮中へ入る常ふ肥うる奥の肉を王女ふ送る。ゆづるを  
 やるふ取す。王女大ひよ。怪あんで是を問ふ何ぞ願ひ求る奉  
 たりやといふ。母王女ふし。上るやうり。ツの脚願ひあり。何奉左  
 右の人を志りぞけあ。當ふ以てし。上登り。といふ。姫ハ近所  
 の女中を一人も残らず。志りぞけ。何やうの願ひあるやと尋ね  
 へむ。さうふつ子あり。いつぞや窓から王女の脚姿をえ奉り。文  
 より哀慕ひ。昼夜忘るさうしけり。終ふふむ。むきとふ。さう  
 病ひとあるま。あさうき。命尽ふんとす。願うくハ愛隣  
 さま。またさうく。女ハも命の延らさうふ。やさうき。脚ことをふり。

御かけ下さるを生き世々の御恩あらん。何分も我子の  
命を御助け下さる。願ひけしを。王女をわらう。思  
案まろ。のめひける。此月十五日。鎮守の社内  
みかろ居よ。其社の内にて。母の天ひみよる。び早速歸りて。我子其事をわたり。願  
ひ叶ひ得たり。今日十五日。入夜半より。社の内。忍び居  
る。爾の姫の父大王。向ひく。のめひける。社の内。忍び居  
る。神の諸祈らんと欲も。りし。と願ひ。大王の

う。大ひみ。諸す。と。申其日。も。王女  
の車。の。神社。の。諸の。従者。勅。門を  
開。せ。門の中。へ。入。る。事。あ。と。王女。唯。一。人。神の。社。へ  
入。る。時。此。王。城。鎮。守。の。神。思。惟。す。是。入。る。る。大  
王。當。社。の。施。主。也。此。小。人。の。王。女。を。け。が。し。辱。れ。む。と。す。と。  
此。小。人。を。誅。む。と。覚。え。て。王。女。入。り。て。深  
く。寢。入。り。正。体。あ。り。し。を。以。て。あ。と。せ。と。も。あ。り。す。是。よ。り。  
環。路。の。價。ひ。十。万。兩。あ。る。を。遺。り。て。ま。ゆ。り。後。此  
男。覺。る。事。を。得。る。や。ら。く。の。ひ。を。ま。て。王。女。の。来。る。を。あ。  
大事。の。く。喜。路。を。送。る。を。愁。へ。千。悔。万。惱。あ。て。ふ。け。さ。る。

名あり。更ふ其かひふし。外目も暗くや。かゝると思ふ也。  
 終ふ。燄火内より発まると。焼死す。安を以て知る。女の心。  
 貴賤上下を撰む。唯欲する者も。従ふとら。の間遠く。  
 此王女も。くく。ある。又昔。王女あり。旃陀羅の事。  
 従ひ。不浄を行す。又仙人の女あり。獅子も。隨逐ま。満  
 を把す。種々の因縁。悪事を志して。強く憎む。愛著す  
 る事。ふくことあり。交わて。近寄。色う。す。恐を慎むべし。  
 ○西院の河原。口号傳二ふ。く。女。物事。や。く。常。三  
 業のふるまい。和。か。ふ。其。本。性。恐。る。ま。き。の。地  
 夜。ふ。く。更。た。る。男。も。合。一。の。恐。る。ま。く。の。思。ふ

福。女。も。思。ひ。ふ。く。行。合。て。各。別。物。す。と。き。者。也。是。本。性  
 の。恐。る。ま。き。の。事。也。年。生。の。く。か。の。事。ふ。も。と。と。や。恐。ら  
 や。と。い。へ。ま。一。念。と。り。あ。る。事。の。て。え。と。を。申。く。男。も。時。と。ぬ。と  
 ぎ。を。す。る。者。也。紀。列。年。妻。郡。熊。野。村。平。藏。が。娘。林。と。り。ふ。り。の  
 あり。西院の河原。炭賣。藤。太。も。別。塗。一。が。別。と。く。久。鋪。便。り  
 も。ふ。き。な。み。唯。一。人。藤。太。が。方。へ。尋。孫。の。日。暮。て。夜。の。四。頃。あ  
 り。春雨の。あ。り。ふ。の。く。男。も。行。ぬ。夜。の。道。を。女。の。一。人  
 の。と。ひ。ふ。く。ら。と。き。の。と。い。で。所。み。大。川。の。つ。く。か。り。せ。か。  
 且。り。水。か。さ。ま。こ。り。て。橋。の。中。程。打。切。と。り。其。切。向。み。と。食  
 の。死。體。と。見。へ。く。か。り。入。お。の。づ。く。繼。橋。の。ご。と。し。と。ま。一。念





るる公の内藤太公恐るるもことごとり也平生如何の事ふん。こ  
とや恐るしやとらふけと芸甚服立むかふ及んでんかきふり  
ありゆふとろし地震するもことばしひかある男も好ひがごとし恐と  
慎ましく近寄らざらん

○難波記ふ太閤秀吉公十三の條の中入七人の子を持て女ふを  
をゆるす登りて手とあり誠まわりの女を浅きものふて已  
まが色欲のあつ内姿とまかざり他人のうろ目をかたごとりて  
夫とふ入夫不實也常ふ入夫とま尻ふまき家内ふまびこり我  
後をいひらじこまり果る事尋く夫と入立腹痛く追出  
さんと男の事度く也亦りといへま子供も不便ふり又世上の

外陣ころろし身上のよとまふもふり。旁く以て垢忍を  
て弄るまよきことと入思ひ。うろの空みて目をくす。是等ハ  
女のたふむむ金き事也。女房の役ハ善惡まふ。夫と入隨ひ  
た切み仕へく賤婢一働ふ家僕の妙く入百入おけても娘の時  
のを持てろくま登りとあり。是も又を得置金き事也

○家入又好ふ事まらふ横著者あり其者のいふ事まきけが。  
おろし後生探願のふ入成しゆふ。佛や仙人ふふりたてふ。  
霞を食と一木の葉ぐ他と着物を着探入さけの嫌ひたとへ  
神通を得く空を飛ぶ見物のふい。かる葉を足る中うで成し  
面白事ふ。おろし俗情ふと。二十四文の酒入四十の酒うま

ひとくちよとび  
のむの月よへ  
ホミ味せんぢ  
ふよとふとち

いろよまき  
たふ人よふ

うらふーい  
女よとむと

よのちの  
目うらふと

ふよとふとち  
まよふよとち



ふー

鬼とあらぬ  
かたぐいにて  
いまよひと  
うちよのま  
とるちと  
ろーと  
と也



をアケの給仕きんじより大若おほわかひ娘むすめのあやしくかぐまくのめるとしめて  
狂きやう弄りやうをよしご。酒さけをかん料理りやうりハ氣取きとり飲のみたが。ちん猫ねこをく。子この出いぬ  
ふよりと何なに所ところハ遠とほ慮りもあく。まごふ事ことをわゆる男おとこ也。あいらと  
むゆる下した。女おんなのとむへるよりぬ位くらいひあう。此こゝ表あらわやむふありたく  
ふい。あいらとむばをらひ芝居しばいを見み。女おんなのとむへるよりあうまう  
樂たのしみまわ。夫おつとがふい位くらいあう早はやく死しんで仕舞しまいと。ふとくむらけ  
るカハハへてする。こいつハ不届ふとぎ千萬せんまんの力ちから也。そんな事ことハ誰たれも好  
ふと芝居しばいハ福徳ふくとくを失うひ。損取そんそと雜儀ざぎの道みちふとハ誠まことの智ち者ものハ左様  
ふ事ことハ変かへり致いたさぬ也。夫おつとを樂たのしみくと思おもふハ愚ぐ鈍どん不智ふちの馬鹿ばか者もの  
也。放埒はうらうを。樂たのしみくと思おもふカハ迷まよひ迷まよひをわさねる狂人きやうじんなり

智ち者ものの眼まなころろ見る時ときハ大おほひある苦くるも也。夫おつとを智ち者ものハ左様  
ふ事ことハ致いたさぬ也。我われ終つひ放埒はうらうハ人間にんげん仲間なかまハあうず。乞こ食じき非人ひにん  
仲間也なかまなりと悟さとりて閑ひまと上あぐ。身みを慎つつしむ詞ことばを慎つつしむ。不法ふぽうの夏なつ  
ハ秋あきもせぬ也。若わ不法ふぽうの事ことをせむ。家いへを失うひ身みを亡なし  
家来けらいけんぞくみ。ふんぎをかけ。苦勞くろうを求もとむる道みちふとバ。實じつ  
智ちの善ぜん人ひとハ変かへりてせざる所ところ也。をアケの給仕きんじより大若おほわかひ娘むすめの給  
仕きんじからまくのめる事ことハ。百ひゃくも貳に百ひゃくも兼あ知し志しる居いる。亦またと芝居しばい  
んふ好このふ事ことを考かんがへ。後のちハ大おほひある笑わらひかまう。世よの中なかが安  
ふ暮く一ひとがじ。夫おつとをふらむであう。むアをであう。ふが都みやこ  
合あのよい人と相談そうだんあう。安やすふ世よの中なかをまう。中なかハ愚ぐ者もの飛と

狂きやう從じゆ心しん得とく 二編下 十八

上り者其の志ある事ふりし事。大智明察の志やをの事ふりし  
かるい人であらうてりある。絶うらす。口から出た才の事をいふ  
て。人の心を迷ふ事とす。大悪無道の人也。大酒色欲一切  
災ひの根本也。色と酒とを大敵と志すとい。智者の格言也。  
全体色欲より刀取まよふも出来無理も出来也。夫れは色  
とりし字入刀とりし字をかしく。下ふ巴とりし字をかしく  
ふり。是れ蛇の物を吞たる形ちみまて。我慢悪事のさざじ也。  
家の断絶も妻くは色欲より起る。夫れは糸へんみ色とりし  
字をかしく。絶るとよむ也。是れは色情の悪事たる事なす。  
ある。絶。都く全恨をやりがり。奢るといふも。妻くは女を

脱とせんと思ふより起ると。孟子の註みんへん。あくが全  
恨賊寶をやりがり。衣服家宅をかざるも。女をよらうことをせん  
が為ふす。人妻。愚痴とりし。全体名命をとりをつよく  
好む者。心の底よりつげつる所ある。色情も迷ひ。又たまこ  
と安。奢る者。北真者。不忠者。夫れは大事の用みり立ぬ人也  
と。帝遺訓みんへん。いづれも色と欲との二つ。一切災ひの  
根本とある也。の浮世入り。色と欲との二つ。いつ迄とあく。つる  
がとみけり。此色欲の二つが強い。成佛ゆせ。今も六道も迷ひ  
くふんぎす。也。色欲の二つが一切災ひの根本也。貪窮ふんぎ  
のえおめ也。色欲の二つへんを福徳安を此上ふ。色欲

三徳の得二編

の二ツより無理が出来なく。世の中が濁る也。此二ツの迷ふぬ人の心  
 り無理にせぬ者也。心清浄にあり。万事安んず也。又色と欲と  
 一の迷ふ人の油断す。益々々々。何所ぞでハ。悪事を志して妖の皮  
 をひらくらす者也。考へ見よ。益々々々  
 〇鬼よりも。猶ほそら。や世の中。色と酒とを。おととさる人  
 〇酒のんで。三味線引く。氣をうむい人をとり。人の鬼のまじり  
 〇一口入取く。のむの。目も見へむ。三味線かぢる。鬼を恐る  
 冥途の鬼に。此世へこぬか。あ。ん。と。事。ふ。し。恐。る。く。み。足。す。誠  
 の恐るまじい鬼といふ。美の志の顔を志る。金持のやうな。根さ  
 せるを以て。豊を叩く。おまへへ。く。く。川。ち。を。ふ。い。物。あ。り。く

よくうそをいひ。あさ川このよ。あ。み。ま。ふ。ん。ご。の。や。し。ん。  
 女房さう。あ。く。こ。ー。が。そ。み。と。ら。く。この文句。ぐ。か。い。く。あ。る。  
 け。の。う。ま。志。の。版。が。立。く。あ。り。ま。せ。ぬ。と。秘。め。付。く。る。眼。ご。し。ん。  
 紅粉。楮。口。血。を。と。ぎ。た。る。如。く。也。亭。主。の。身。の。毛。を。よ。ぎ。て。  
 お。そ。ろ。ま。く。思。ひ。其。ふ。ま。を。ん。付。く。ま。く。ハ。一。言。も。中。の。所。ぐ。  
 夫。の。こ。を。ま。ふ。ま。舟。の。や。う。で。ヤ。エ。誤。か。い。い。あ。や。ま。の。川。こ。く。と  
 い。へ。ま。中。く。き。か。ぬ。お。ま。へ。の。女。房。さ。し。て。こ。ー。が。そ。み。と。い。ふ  
 たら。その。ド。の。願。ひ。通。り。み。す。ん。と。あ。ぜ。い。ひ。あ。さ。川。こ。と。真  
 思。ふ。さ。ま。を。わ。か。し。知。り。根。さ。せる。を。ふ。り。ま。さ。す。を。誠。の。鬼。と  
 り。ま。ま。入。誠。の。鬼。と。い。ふ。者。み。あ。り。す。格。氣。深。い。女。房。の。事。み

老く丈夫とをせむる山の神とり入者也。誠の鬼とり入るとん  
 ふ物でふし誠の鬼とり入るとん。川まいものやうな角ををせし  
 唐よりこの毛のやうな髪ををせしめうぶのやうな髪をを  
 むき出し。ふのりのやうなふんどしををせし。長いものやうな  
 棒をふりまうす。誠の鬼とり入るとん。何サ鬼とり入るとん。ふ  
 八百屋見世ををせしやうな物みゆらむ。誠の鬼とり入るとん。狛ちり  
 めんのふんどしををせし。池川かうのやうな。角を何ぞんもや  
 ー。白ひの油を舟。光澤やうな。髪をふりまうす。顔えりくと  
 細まゆ。年ハ既望十六七。八九世の色ざうり。こゝろも氣絶を  
 志す。ふ。う。つ。つ。の女。酒をのんで。三味線を引寄をう。この人の

精氣をうむひ。後入其人を取。一のこふするを誠の恐ろ  
 ちの大鬼といふ。是ハ地獄の鬼より入る。ゆ。どこ。現入  
 見く知門て居る。事ふま。う。と。傷りかけ。狐。一。他者も  
 鬼不取。つ。ま。ゆ。全。浪。を。ま。か。取。ま。三。三。八。ん。も。裸。ふ。こ  
 まで。ふ。ん。ぎ。ま。う。う。う。う。知。く。居。る。其。尻。尾。が。借。金。と。変。ま。て。  
 今。不。利。が。ら。ふ。ま。ね。ふ。飯。米。も。小。き。も。衣。服。も。ふ。一。生。貧。乏。あり。  
 誠。不。恐。ろ。ま。い。鬼。と。り。入。る。緋。ぢ。り。め。ん。の。ふ。ん。ど。し。あ。と。女。の。事。也。  
 外。の。り。の。こ。事。不。間。違。ひ。の。り。の。事。也。事。不。於。て。入。り。も。間。違。ひ  
 一。皆。く。よ。く。美。知。ま。う。此。鬼。不。取。つ。ま。う。ぬ。ま。う。ふ。す。い。川。柳。が。桑。句  
 ふ。も。緋。猪。狛。虎。の。皮。より。恐。ろ。一。や。と。よ。し。も。間。違。ひ。一。虎。の。皮

の積鼻ツクノビと鬼オニはつらまの川カハに身上仕舞カミマシと者一人もあらず。ひ  
 ぢりめんヒヂリメンの積鼻ツクノビと鬼オニは取つらまの川カハに身上をまきつと者ハ  
 山ヤマとどろく。虎コウの皮カの二布フタと鬼オニは取つらまの川カハに裸ヌダとさま  
 と者一人もあらず。ひぢりめんヒヂリメンの二布フタと鬼オニは取つらまの川カハに  
 裸ヌダとさまつと人ハ世間セケンは澤山タクサンあつ。虎コウの皮カのふんどしフンドシと鬼オニハ  
 大きオホキとこころもまき。終ツグ入イを取つらまへく。まごか入イとさ。金カネ  
 根ネを取たり。人ヒトの身上カミをこまきとらふとさ。とらふ事コトをまきとす。  
 ひぢりめんヒヂリメンの禪ゼンと鬼オニは取つらまの川カハに土藏ツツをうり株家督ウケを  
 失ウシひ。よい身上カミを捧タテマふりて。其男ウツコの形カタ方をまきとす。妻子ウツコけん  
 どくを路頭ロトウ不迷マヨらす。其身ミ一人ヒトのふんぎフンギハ是非ゼヒもあらず。毒ドク子コけん

どくドクのふんぎフンギと事コト。氣キの毒ドク千万マンナンあり。虎コウの皮カのふんどしフンドシと鬼オニと  
 鬼オニを怖コソるコソふと鬼オニはひぢりめんヒヂリメンの二布フタと鬼オニハ誠マコトとまそろ  
 しい。かゝるカカるルまじと近寄チカヨぬヌとす。けいせいケイセイの泪ナミで藏ツツの屋根ヤ根ネが  
 める。とらふ發ハツ句クハ相遠サイエンか。虎コウの皮カのふんどしフンドシと鬼オニは取トル  
 つらまの川カハに地獄ジゴクへ行イき。ひぢりめんヒヂリメンの二布フタと鬼オニは取つらま  
 のて座鋪ザキへマ上ウるルぬヌとす。苦ク上ウりルと地獄ジゴクのせめよりん。百千ヒャクセン  
 万倍マンバイの苦クと事コトあるアルぬヌ。恐コソるル也ヤ慎シむムぬヌ。ひぢりめんヒヂリメンの  
 禪ゼンと鬼オニは取つらまの川カハに變カるルと近寄チカヨへマかカらラむ。又マタひぢりめんヒヂリメンの丈長サヤ  
 かけカケと娘メカと事コトあるアルぬヌ。とらふ事コトハハ身ミハハ又マタいイかカ。若ニハさサとらラとらラ。  
 何ナニのノかカのノといイひヒ事コトがガ出デ来キと。終ツグ入イハハ大オホきキ川カハをヲまマとらラぬヌのノゆユと

ひあらしん。いげき緋縮緬の類ハ。男ハ大禁物とあるぞ。一。  
 鯉ハ胡柝。鯉ハ焜西凡。和申散切きず。梨子よりハ大毒也。  
 ひぢりめんの毒ハ班猫よりハ殺生石よりもよるどひどい  
 毒也。此毒はあててくまうく氣を失ひ金を失ひ鼻を失ひふ  
 ぎやくとあける人死す。又死した人も死す。世ハ恐ろき  
 とりハひぢりめんの毒ハ氣也。曼ハ表へ入へる野の命取の大  
 毒ハあててくまうく人く也。又表へ入へぬふことの借金の毒  
 一ハあててくまうく一生食をふんぎす人あり。是ハ百千万人ハ  
 ちくがどへくことや恐ろくや出す。身の毛ハ彌立と  
 ちくがどへく其様ハ怖ろきも思ふぬぞ。二十八人も

。花をさるもののやうにけりきつはかりの色よや入迷くとて









一、かすこふふもとのいへる也。連も及む事あるまじき見候こ  
 が因果也。叶ふぬ道も一ひ出でては福をあるぬ。若しけりぬ  
 志るにるよひ返事の時入の所詮生る入居るも取けぬ也  
 ふか、思ひ沸くこと何でも一ひ出でては福をあるぬ。若しけりぬ  
 らまてて、百年目死んでまする入分の事。一度死を二度の死ぬ  
 と思ひ定めぬ。命かけぬ。ふまをやりたのむ事也。何と此  
 位ふふこと。徳を好む者がござりませう。唐も。日本も  
 一人もあひ。孔子の徳を好む事。色を好むがごとき者をむ見  
 ずと。あげきあふも由を千万あらずや。此意入深くも志る  
 入もあらず。又合思ひとりの入もあらず。行思ひの目入ることを

かりの事也。ちとと云へ。君の姿が目入る。夫からて不す泪  
 ごとりけり。とりの奇の通り也。此方で入首たけ。脊だけ。ふま  
 をかき。さき方でも。あふまのり。志まてまて。外聞かま  
 るいと。おどげふるけて。嫌ひ入。あふま方をかりで。志まて  
 ふ入。身の不どをまてぬ。のろまてと入へ。色入。命を捨る人  
 身。善事入。入かを不す人も。福德安もあき善とまてべし  
 〇身忘れ。十重も廿重も迷ひける。一重の皮の。うけり。まふ入  
 〇老。若きも同。上皮的色入。我身をだ。ぬかまてつ  
 〇いろ。うまの皮。まてりて。世を渡らざ。身をまてつぬける  
 恐も。恐る。色入。男女の上皮の色也。此皮をかり。人をあむら

子よみあしむと欲の皮もあけり身在老けぬ。うその川もあけり  
 人をとめるふとを。氣を舟てとめくはぬ。舟うみすう登り。又ふの  
 水をさきをまきむとしく。目えの監ふをまより。人を落す穴と志ら  
 ず。あつ。笑ふ。穴の穴入。落入。色の道ふ。轉人と志らむと。肺の  
 白き入。迷ひて。通を失ひ。智慧を失ひ。金銀を失ひ。着物を取  
 ち。御とめ。みまむと。かとのゆる。由度くふとを。癖とふりて。一生  
 も。どろ。あつ。う。う。あ。い。せ。か。あ。よ。い。い。せ。を。舟。く。う。う。い。せ。を。  
 舟。あ。う。す。す。登り。色欲の感ひす。一切の災ひが起るとあるべし。  
 此感ひの老くるも。若きも。同一事也。然と云。壯年の者入。猶途  
 ひ。安し。是を急度。慎む。登り。若。是を。慎ま。ざる。は。於て。八。世。界。中。

小福徳ふ。後入。乞食。非人とふ。けり。橋之町。山崎町。の小屋  
 任居とある。登り  
 ○若き身。殊。入。慎め。皆。人の。ふ。と。迷。入。の。入。こ。ひ。の。や。ま。道  
 此。世。ち。う。り。三。十。四。五。の。う。り。の。道。折。く。る。い。い。い。ん。出。る。もの  
 此。歌。入。間。道。ふ。若。ひ。衆。衆。く。る。い。思。案。を。出。ま。と。登。う。う。す。  
 若。う。い。思。案。を。出。せ。ま。大。ひ。入。後。悔。す。事。の。り。外。よ。い。男。よ。い  
 女。も。い。ま。い。バ。女。男。で。あ。け。ま。い。あ。う。す。女。で。あ。け。ま。い。あ。う。す。と。世。間。せ  
 ま。く。一。途。入。思。入。べ。う。と。む。二。心。の。不。實。者。や。因。縁。ふ。さ。入。の。い。ま。り  
 志。慕。ふ。登。う。う。す。鬼。角。因。縁。入。は。せ。く。う。う。と。べ。後。入。入。心。も  
 か。よ。め。て。其。か。う。入。思。入。ぬ。者。也。う。つ。り。か。う。る。者。ふ。り。是。よ。い。の。り。く。

つがいの心を要す極うらむと。さるの思案を申すべうらむと。若ひ危  
此事をまわく志川く必ず。短慮起まを極わく事

○若ひ者ハ勿論老人也。色欲よりあやまる人なり。然も若年寄  
ハ若ひ者なりと入思ふぬ者也。唯何と云く。いや思ふぬまじく  
の事平して深く好まぬ者也。又好きたり也。若ひ時平と入面白  
かろす。又役立ぬとあるべし。可入の八十二ふ川て色色と欲  
の道火ハもへ袖去けむりた川あり。とあり是は相違ふし。  
夫也又一がひみのひがき入あり

○年寄て品こそかまふ。ふす業ハやまむ。むうのひまへてんく  
○霜かまのなき草と入のま也。女郎花ハ入尚かびきけり

の年寄く。果格へ志て女郎買ふ。あらしと入行人ありのすき。  
あがらむと入行し相違ふ。女郎昔がハ入ちと川さんか来こ。  
金浪を豊ひませう。暑物を謂へく。其ひませうと。いつて色事  
志すハと入らぬ。若金浪もとまむ。暑物もらとぬ位あり。老人ハ  
いや志やと入川く居る。是も志也。又中入色く入氣質が  
川川く若ひ者と交り若ひ氣で居る人あり。是ハよらしくあ  
す。却くたまささ。笑ふ事なり。年寄ハ年寄の風は。  
若く見せら入及む。余とまむさハ入ら。随かこと入氣を  
く行義よくす。老人公得の奇ハ  
○人の為よき事。あしが諂ふと。きかせ。老が身のやく

○老人の免やせん鳥と男の間ふ。ちや目入ととく。ひまふ死るぞ  
 ○老人の暮ふふどらへく。能勘へ強欲やめく。かち道を見よ  
 ○老人の目等よくある。勝と見を早くかくめく。世を遠る心し  
 ○老人の望まをやめく。一心小後生を願ひ。念佛とるへよ  
 老人は是等の歌をとり考へく。後生を願ひ念佛を唱ふべし。  
 無能上人の和讃。最早日暮の旅の空せ川ふもいそげ息  
 たへを則ちゆいそく。生とるん京九重の花の臺入といへ身の上也。  
 老人の必す。後生を願ひ念佛を唱ふべし。最早日暮の  
 旅の空といふ事。をよくある。極重悪人。念佛の外不助  
 かる道ふ。若念佛より外ふよき道ありといふ人。佛法の真

儀を心得ぬ人也。經文の見やうを知らぬ人也。經文のえやうを  
 みるぬ人のいふ事。の使く用也。極重悪人無他方便唯  
 稱彌陀得生極樂の文。よてよくとる。是は惠心僧都の仰  
 ふまう。或芸問。是を定規とす。此外の人のいふ  
 事。取へく。悪人凡夫の安くと助る法。念佛より外ふ。此  
 とまふ。夫昔身心清浄ふ。般若の實智の例。よく  
 修行する人のいふ。道のより。勝も次。成佛志ある心。  
 無智の悪人。彌陀の本願。念佛より外ふ。助かる道。ふつふ  
 し。是みよ。修行住坐。臥ふ念佛を唱へる。念佛。若び者も唱  
 ふ。況や老人の猶く唱へる。念佛。大善大功徳入



○ 恥恥かくすはみれたまも迷ひけり美人とらふもろのころり  
臭皮囊圖 ○ がいちろのうをよとふく死んか



垂帯の尻りりぬまびつちのすふとぬちみとちびつちのいさ水く  
たへぬまを紅顔むかしく魚んへく自骨とあるは骨くぬく  
玉より名川く男女ともふぬまの骨をよとふく死んか

いづまの人もがらこつみゆらざるかあて尺一室のうらふらうらうきん  
らきのちがいのひまども象のくさやまぬまおとこあふのまどきん  
ころちがうーあのもくが身のうちあていかに三十六の不洋ゆつて  
九死よりあまいづるすまことよまらうが海嶽入あたるま

柳川三信



九想詩みりく男女の姓樂入互臭骸を抱くといへりかやう  
よふゆてもいどうかあのとらみく全根をせらふあやみかん  
ぞうまもくもまらふかすのふ根がまらみけいりつとあつとさ  
ようよつうんとりめうけとまらりた



樂といふ是より外によき樂と入ふきとある也。聖人賢人  
 として外に何ものかりたる事なし。唯正直に我身の勤むべ  
 き事をよく勤めし。其外の事を願ひおらず。唯取らよく  
 公を落舟し。人無礼をせず。道よむがよし。事をせず。  
 唯善事をまゝく暮し。人の聖人君子に何ものかりたる人あり  
 らむ。無理の幸ひを願はず。無理の高位高室を願はず。樂を  
 求めせず。唯律儀正直に暮しを樂とせしめ。今日を無憂  
 みることを大安樂とせしめ。何ものよしおをらむや。色事をす  
 るが。樂をみるす。未だ大苦勞とあるか。賢人の受てせざる  
 所也。唯小人愚者の好む所也。今日王法をよく守り善事をして

らすす不とよき事ハありとある也。一  
 格窓湯筆後篇とあり。堯舜聖人とく。別は四目両口あり。人  
 あらず。唯公得のよき人をいふ也。別は多般あり。人あらず。公得  
 のよき人ハ立身出世をす。天下を治む也。公得の悪  
 紳人の身を亡し天下をも亡すべし。桀紂幽厲の類は不  
 得至極の人也。公得ハ聖人の經典も諸子百家の書も。皆公得を  
 下くす。爲の道具也。又深まり深入り。性命の奥を論ず  
 るも。身の益あり。身の益あり。治國平天下の大道  
 あり。公得の益あり。公得の益あり。是より何れも。書をよく。賢者の智慧  
 をかりて。公得をよく。無理せず。無理の事。中道のよい所

を通りぬるべし。又ひまり奥深き事をりぬるも益なり  
 ○正直律儀ふかせぐ人の世界第一の實也。不實不埒者の世界第一  
 のすたり物也。不埒者が所る左の家をやぶり一家一門へ大難也  
 をかけ一脚上の脚苦勞もたへぬ也。誠に世界の惡たま者深く  
 り一編の左の又篤實の君子ハ一親子兄弟一家一門也。其余光  
 榮りて安んん。世界第一の寶也。富貴自在安んハ一此人ハ  
 所る衣服家宅をかざる所しくかる人也。福徳由りまい物も  
 好まず去る。自然と天より與へぬ天より受る處の福徳ハ  
 此の誠の樂也。君子ハ一此樂を願ふ事也。此道理ハ一つり者  
 のある所ハ一むむとくの智者のこもある所也。實に此道理ハ一つり者

事を一つく志す。身を慎む一家一門の頭とあるべし。よき  
 男。よき女とりぬ男ぶり女ぶりのよきをりぬす。我つとむべき  
 事をよくつとめる。公まげかみ奢りたる事をせず。物事を  
 やらずかみまる。人とりぬす。虚儀をいふす。正直柔和  
 あるを。よき男。よき女とりぬす。何卒よき男。よき女とりぬす。  
 ○羨目よりも公のよきハ一ままりける。惠方果報も。高きもたふく  
 若又家業不精也。身分不相應のおごりを致す。山事をた  
 らぬ人の難儀をかまりず。已むをりぬ事をせんとす人ハ一大  
 惡人也。不人情淺智惠の人也。福徳安んハ一少しもからぬ。夫れハ一難  
 矣す。人也。用をまる。近寄るす。若近寄るを大難題を

引受る事有り。恐る處。

○骨からまを皮み入誰も迷のうん。美人とらみ。皮のうまあり

○皮みこそ男女の差別有り。骨み入かろ。人形もあ。

○うま皮をめぐりて。んをが。膿と血の美女の。醜女も同じらま。

此三首の歌をよく。悟りく。色事なり。至りて。馬麻く。

物あふ。夫九想詩。男女の。婦樂入。臭鼓を抱く。

といへり。是も。同。遠。至。川。き。所。至。川。て。う。

あ。か。う。入。思。ひ。執。心。入。是。不。と。の。大。迷。ひ。入。あ。う。子。人。考。へ

あ。ん。歌。入。の。戀。と。ら。其。源。を。た。げ。ぬ。ま。を。と。そ。あ。か。の。二。つ。かり

けり。と。可。圓。和。上。の。歌。入。の。骨。を。か。む。大。より。も。猶。あ。さ。は。し。や。あ。の。か

血。改。ま。ま。衣。布。り。た。の。ま。む。と。あり。是。等。の。道。理。を。よ。く。表。し。て。あ

ま。り。色。欲。を。好。む。べ。う。子。今。の。小。樂。入。迷。ひ。後。の。大。苦。を。思。え

ぬ。あ。ま。り。智。恵。ふ。と。ら。み。佛。教。入。薄。皮。不。淨。を。覆。ひ

く。身。の。穢。ま。を。見。へ。う。ま。む。と。ら。み。此。入。薄。い。皮。一。重。を。以

て。不。淨。を。か。く。ま。う。え。へ。ぬ。ま。う。入。子。と。ま。身。三。十。六。の。不。淨

の。時。と。し。て。九。陀。より。流。ま。ゆ。也。さ。ま。が。繪。が。け。か。あ。ふ。不

淨。を。盛。つ。る。が。び。と。し。至。り。く。ま。う。佛。菩。薩。入。勿。論。智。者。入

臭。皮。囊。と。ら。み。大。ひ。入。嫌。ひ。あ。あ。入。愚。人。入。身。の。肉。の。不。淨

を。ま。あ。ら。ま。う。至。り。く。愛。す。入。て。ん。倒。の。甚。疎。也

○和。田。海。を。皆。か。と。む。け。く。洗。ふ。ま。身。の。け。が。ま。い。う。ぐ。き。よ。め。ん

身の肉の不浄をよく観るなり執心する事おかし  
 ○花を見る道のり古狐かりのいらしや。人まよりのん  
 見る布どの入みむを迷ふ。何の荷入も世話入るあらぬ女ふ  
 公をうごかす妖まろ下ごこと。こりちから頼む。女の方で用公  
 まろ。何處の馬の骨もぬ人老やから。物もゆるまいと思ふて  
 居るふ此方からゆを起して。まろゆる道のりちへ初ますと尋  
 祿より。こい川へうまいおといのう相ふふ入りける。在入といふべし  
 ○京名所圖會三小昔一清閑寺真慈僧都とのりあり。あつた  
 暮入門外ふたぐらて行かへ入をんゆら。髪取ちめて  
 羨女一入由くをえろ。忽ち愛を起しせめろ。物をものひたさ

と思へ世のひかくべき使りあけて清水へ行道のりまどと。  
 向けをむかの女直ふ可をよむのり。みだる本みるのをうそくて  
 誠の道入いそであるべきと詠まろ。観音大士と現トさりあへまろ  
 僧都へかく禁置まろ。彌く修行まろ大徳とありおへり。  
 其所を歌の中山とのり清水寺と清閑寺との間みあり。上代の  
 大徳すろ。君んあら欺ちをえろ入公を迷ふろ。あつた。况や無智  
 文盲あ。若ひ者世へあまり無理ゆかし併ふから何の役ふ  
 も立ぬたろと言也。曼も在人ありたしおむべし。實入女も知りも  
 せぬ入ふよの女老やと思えせろ。妖したがる。又男も氣もあつた  
 女も化さしたがる。化さるふと思へ處へ化ささうとするからまろ。

たまのらふい後み入大難題を引おろし互ひ入大事の身を  
返やまると人間世の馬鹿よりのことなり

○人毎にきるや狐の皮衣妖化さきく。くく世の中

○おのろ身よ。化さまるとのたまあし。くく。狐狸を恐まぬる哉

此二首の歌よりよくあるべし。男の女よ妖さき。女の男よをかま

く。互ひ入一生を返やまると是れとことろの化物なり。狐狸の恐

たうす。免角こまの。色欲の災難也大金を失ひ家を失ひ身

を失ひ恐るる。此の第一也

○身の料入其品くみかまこと。色と欲とを根本みく

○世の中入をふまこと。くく。事ある物なり。色と欲との。二つありけり

此歌をよく考へく。色と欲との二つを急度さうべし。一切の悪事

の色と欲との變化也。何事も二つを根本とまると一切の悪事を

たくく。世をた。み。二つへ打わろがし。身を清浄六根清浄也。

入く。此事をよく考へく。色と欲との二つを打亡がす。慾身

の。か。を。の。こ。く。討。く。や。ま。べ。南山大師のゆくと。賊色の二つを断

するを。各。解。く。奉。律。と。為。先。色。欲。の。二。つ。を。断。ず。と。を。其。余。の。戒

行。入。を。安。く。持。川。也。此。二。つ。を。へ。よく。防。げ。を。外。防。ぎ。よ。く。此。二。つ。を。断

ず。り。時。入。今。世。入。福。徳。安。む。の。ま。あ。く。未。來。成。佛。疑。ひ。の。一。何。く。も。色

欲。の。二。つ。を。断。ぎ。を。一。

○京傳が錢光記の金の生木を澤山入植く揚貴妃の争うる女房

持小町のやうな妻を置く。弘明捕まうな智慧が成り、  
 五六百年も生きたり入欲ぞもまきさる。人の心の常也と入へり。一切  
 の人が皆かやうな願ひ也。らんふうまの事、天竺の真中へ往て  
 もあり。唐の横丁へ入らぬ。是れ此表やまの事である。  
 極樂や自由自在國の咄也。

○又三馬がらふ入。何れも大きな願ひ入あいが。その金をままと  
 たま捨ひく。一夜の中、大分限者となり。地面角屋敷をわらわ  
 り買らんぐ。そして色男のわらわと。どけえ。あつた女ふか  
 りいがるま。酒まのんだり。看らん。藍びたい呀へ遊ひ入行  
 此世のわらわんかざり。生く居て榮やう榮花がま。いとわらわ。

こまぐらひの願ひ入叶ひそへる物ごと。廿位の願ひ入叶ひそ  
 める物ごと。何のたうこと。三馬の大だまけめ。よふあくもえ  
 ふ事。まのひ出く。恋まふ。天子將軍様づくも叶く。ね  
 事也。金をま。拾ひく。一夜の中、大福長者となり。地  
 面株家督を買こんである。とわらわ。榮曜榮花をま。此世  
 のわらわんかざり生く居りた。是位の願ひ入叶ひそへる者との  
 何のたう事。何野を押しと。んふ音か出る。不届千万世の中  
 の人を迷く。悪人也。予三馬ふ合ふ。一棒ふ打殺す。猶  
 引入。喫せしめん。いかれ。ん。三馬のふを能く考へ  
 入る。是れ世の中の人。皆かやうな無理な願ひをする人。









居らば孫をめぐぬ。其上に大地へふりつけらまはさく。死んでまはさく。  
 と。ひきまゝに腹立ちまはさく。ひとくふりつけさく。二言まはさく。  
 ちくちくと往生まはさく。笑止千万也。志先不ど金を物上仁人  
 能く陰徳善根のつる人とえへさく。夫を天かへ黄金を與へ  
 む人も。陰徳善根さへはまを。此方より不しがさす。天より  
 福德を與へむ人も。其まはさく。親孝行の郭巨は天の黄金の  
 金を與へむ人も。今の金賊布を物上と人も。此類あるべし。親孝行  
 の人も。何ぞよい善根をまはさく。人とえへさく。跡うら金を物上とまはさく。  
 人へ。人の金を物上とまはさく。出来ぬ。金を不しが人へまはさく。  
 強硬者也。人が金を物上とまはさく。此方も金を物上とまはさく。大なる

不う大鼻まはさく也。金を物上陰徳大善根の餅がふくて人へ物  
 上へ出来ぬ。陰徳大善根の餅さへはまを。此方かく物上と  
 せむ也。金へ向ふよりいなり也。あるふ此類づく金を物上とまはさく。  
 人へ。因縁いふまをまはさく。人へ。たとへむ。人が大金を物上とまはさく。  
 とまはさく。此方も物上とまはさく。左様ふるまへ。人へ。金へ  
 ぐり。大金を物上とまはさく。種がふくて人へ。あるふえ  
 人も。種もふくて。人が大金を物上とまはさく。此方も物上とまはさく。  
 今へと思ふ。大ひある。今へ。今のみまはさく。金を物上とまはさく。  
 人も。又かくのごとく。此方も物上とまはさく。  
 ○後漢の時郭巨といふ人あり。家甚だ貧乏く。老母を養

三子ある一子あり。妻と四人くも朝夕のけむりも立か孫て  
 貧乏也。其中から母入不自由をさせまのいと夫婦ををくとき  
 身を投おく孝行を尽しけり我子も食物をたんとたべさせ  
 けり。母の孝養かおろそかあるとく我子もハハぢふい物を成く  
 宛たべさせり。母へハハキの物をたんと持へく差上げり。老母ハ  
 ひとまじく孫のやせるを不便と思ひ二人入かくまう我食を孫  
 入與へけり。後ハ夫婦終事をして川に。是でハたすらぬ。天も  
 地もかけぐのふい。唯一人の母也。是ををろそく入てハ相濟ぬ  
 事也。子ハ又生まる事もあつる。母孫ハ左様ハハハハハハハハハハ  
 と夫婦相談者く所詮の所ハ此子かあつる。母孫の孝行かあつる

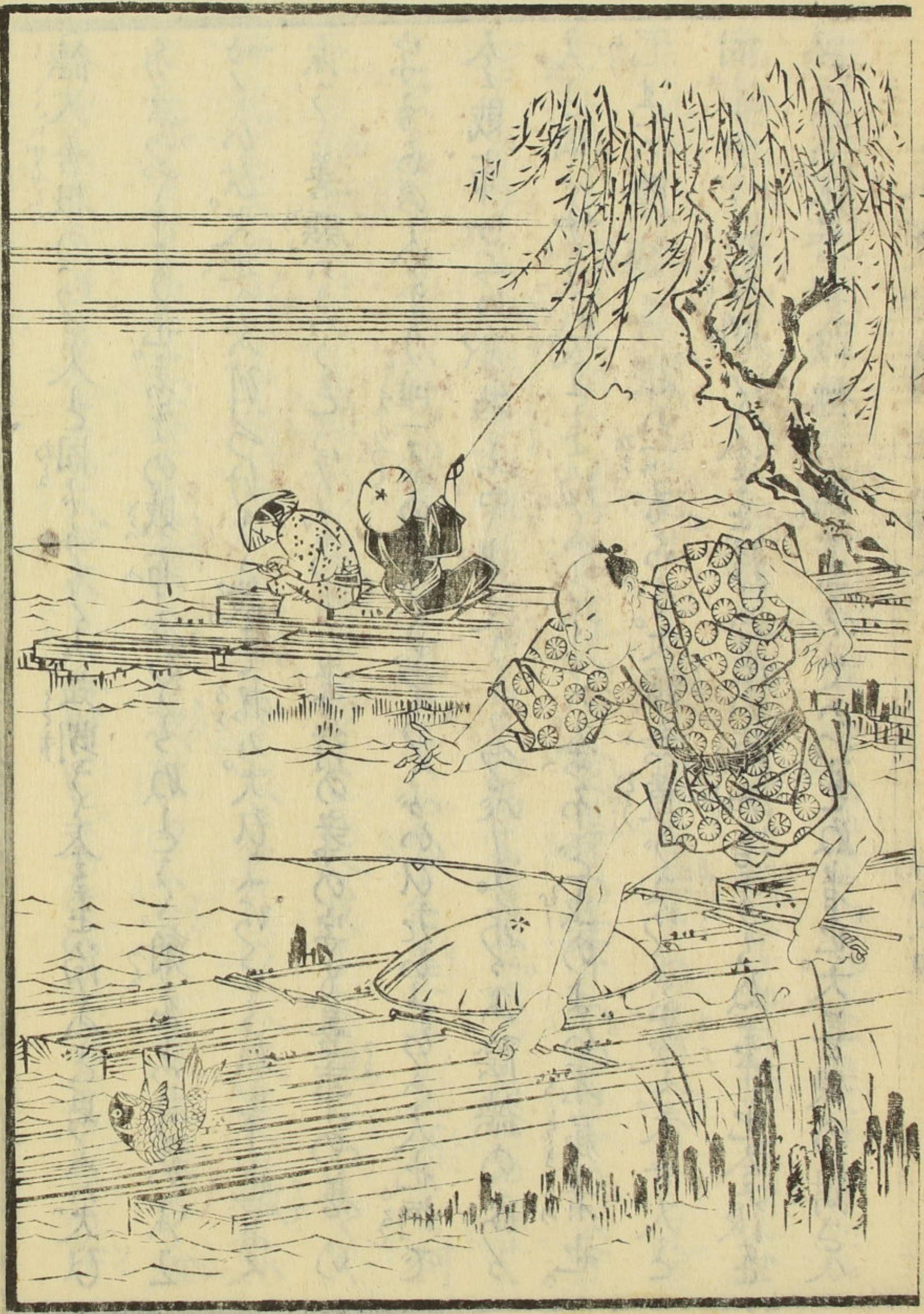
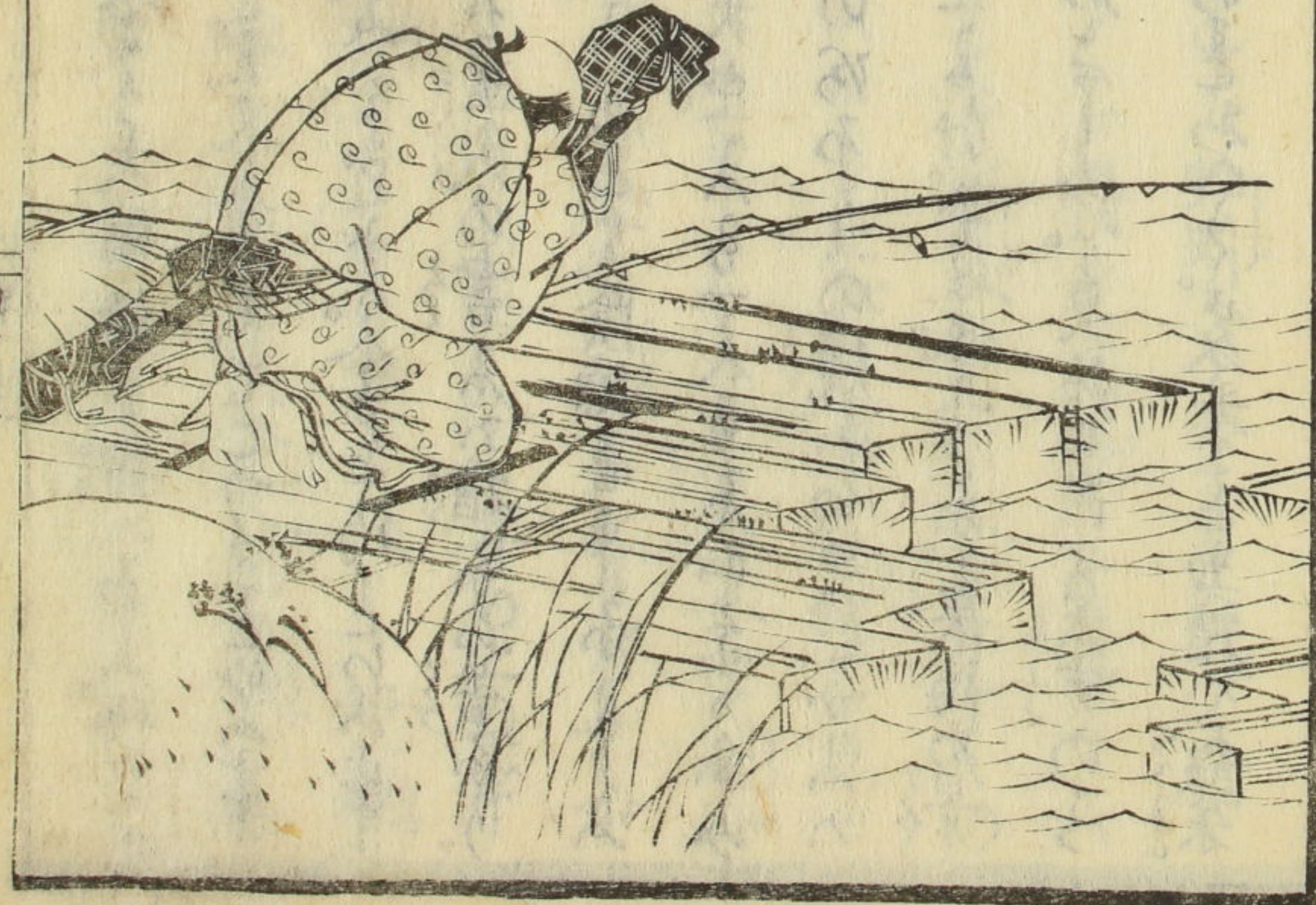
心ある道理ふまを。二子を土入埋ててろふんと思ふ。其方ハ  
 いか思ふやと。たづねけまを。女房も孝行者ふまを。是ハある程  
 法志ぐござりまをといひけまを。丈ハ直入坑をり。或尺ハ  
 すりも不ると。ガリちりといハ音かする。入捨く深く不川く  
 なる。大ひある黄金の釜也。是を不り出まう。天孝子  
 郭巨ハ賜といハ六字か不り舟くあり。郭巨大ハ入愁。慎  
 天ハ向例く三拜九拜。此黄金の釜を以て。母を一生存分。養  
 ひ。つとも安公。世を送り。三子の子も無事。入成人まで。いハ  
 世近。子孫繁昌。廿四孝傳。入えへり。是孝行の者。入ハ  
 天下り福徳を以て。入ハ事疑ひ。一切の子。孝行を致す

一。世間をふるふ大方の人が我子入のよい物をきさせようま  
 物をたべさせく。父母へのよい物を著せしめぬ物なきとせ  
 置入がよい世の中也。又年寄の親を納戸の角へおこして  
 置く人もあり。至りてよむ。是等の事入。あきせうする  
 一。あるは此郭巨の我子入のよい物をきせ。あつた物を  
 させく。母取入のよい物をきせ。よい物を差上く。何うも何  
 近も心をつけく。孝行を致し。あつたは我子を埋ころま  
 母親を大切にするとの世も希ある大孝行の人也。是は誠心  
 出来がとき事也。天の黄金の盆も授けぬ入善也。あるは後の金  
 を約ふとまると男のよい人と入人へかじ。支をいふとりの入陰

徳大善根のあつた人と同トゆう入。蚯蚓く金を約ふと思ふは大ひ  
 ろるあやもう也。あまの敗布がわらぬとく。餽をまるとか入  
 るくいひ。大地へぶつけく。穀を採入。大ひよあつたぬ事也。是  
 一。よく善悪入とまるとり。あるは孝行の孝の字も。善事の善の  
 字もあつた入入り。唯一盃のいづくがうくがいひたいとりの入也。何で  
 金を敗布がらの物やお考へく。あるは陰徳のあつた  
 人と同トゆう入。金を約ふとす。余布と虫のよい不届者也。  
 已ま入陰徳善根入つてもあつ。大惡無道くあつたふら。大善人と  
 同トゆう入。蚯蚓く金を約ふと入存知もよらぬ事也。金を  
 約ふ入。大善根陰徳の餌がふくて入つたぬ者也。大善根の餌と入

深川村のどのいりのうんぐ  
 つのますの向の男の全猿布と  
 物とをまゝの方も金をまつてん  
 とあふところふふあふかふの舟  
 申人、板立くふあをさのいりの  
 上へぶりつけるところ

深川村のどのいりのうんぐ



阿とを。此方より約ふとせず。天より大福德を與へぬ。此方の  
 約ふとあること。つまる者みわくも。又金とてこつとりの事  
 ハ。阿波の鳴戸の淨るりみ阿とを。みもどく。金を約とり事  
 あり。淨るりみこへおのま。かを聖人の書入の措ふの苦あり。  
 金で入をつり女を約こ入。澤山み阿とを。陰徳善事あり。み  
 みもどく。金を約こ入。唐も天竺も。入もふいふ。み  
 らもどく。金を約ふとする。日本一の阿布うの鏡。かろの子みハ  
 かいのがある。畜生ふおと川。大たまけ。なる尺。奥約め早  
 くかへ川。家業出精せよ。汝もわくも。奥約め早  
 くと者。貪乏人也。是よりハををい。家業を出精へ飯采

小生ひの阿る。みすべ。こまを蚯蚓。金を約ふとせ  
 ず。隨分と福德入来る。よく公得。不覺ふき。み  
 まべ。是ハ此人をうりの事。みわく。世叟中の人。皆かくの  
 ごと。無理も事。をま。富貴。ふふ。たがる。夫をを  
 たる者也。無理も事。をま。富貴。ふふ。たがる。夫をを  
 ふ。金を約ふと。人の事。をかり。みわく。人。身の上の事  
 ぬ。是を。よく。老。無理も願ひ。を変。て。べ。唯  
 一。忠義孝行。家業出精。を致。べ。是ハ皆人。見の。不  
 是を。よく。考へ。我身の。為。みすべ。



一 寝るの身一ふん事

一 伊勢の身一ふん事。随分く虫色ぬき。利根がまうく官をが

しりおまうくまうく物りみる事

一 總仕事。とりまけ。人ふふ兼まより覚えへて事

一 火の身一ふん事。ろろそくの地しさ。紙とく等。麻末

ふあうぬきうふ。をまつけて事

一 おいとふと遊びひとくも。何うふをまつけ。おけがふきまうく。利

又おあがりお。杯陸まうく。氣をつけ可事

一 朝入早くあき事。人ふふあきまうく。あうふて入。相海

ふす事

一 終身無事。あうく。床事。つとまうく。ふす。後。方。の。氣。を。存

く。無。れ。ふ。き。ま。う。く。あ。う。け。て。事

一 人をより入。この。た。う。う。ぬ。者。と。を。得。可。事

一 仕事。ま。う。く。の。身。事。と。兼。末。に。あ。う。く。事

一 志。あ。う。ぬ。き。や。不。測。法。あ。う。く。あ。う。りの。後。り。ま。う。く。あ。う。く。

ま。う。け。あ。う。く。ま。う。く。事

一 何。う。あ。う。て。も。後。た。づ。杯。す。ま。う。く。事。利。根。が。ま。う。く。事

一 志。り。類。ま。う。く。仕。換。ト。マ。事

一 志。り。身。あ。う。ま。う。く。事。何。う。あ。う。く。事。陸。ま。う。く。事

一 志。り。ま。う。く。事





者て舟。剗菓芸。請人ふ出立どりの辛より胡麻の大根迄中年九年母ふ相極め。法奉公ふ大角豆中。但し法給金梨子ふ致し。うどの四季せ。茄子帷子冬木綿木の子可下。一守かうぎ操。御法度の。不う風幸致させ。間鋪。若菓物。い。欠落仕。甚敷を改め代物。又ハ青物。取之指上。ヤル。且又香の物。ゆき。而も。氣入。長い。石仕。下。こま。請人。相立可。一宗。代。蓮根。宗。擬寺。地。中。人。參院。且。那。み。紛。在。座。若。横。合。より。御。法。度。の。不。う。ま。ん。草。と。り。者。有。之。且。那。寺。牛。房。口。連。也。不。方。追。も。出。せ。う。が。急。度。や。と。け。ぎ。仕。り。貴。後。へ。

此も黒豆の中間鋪は為後日ひかしたる仍而如件

桃栗三年柿八月 請人青物町茗荷屋たて右衛門店 志と吉

人主神田玉物店豆腐屋麩右衛門店 かんひやん

主人朝倉山井太夫殿

或人のい。娘を奉公。出せ。人。この。を。か。う。つ。是。を。よ。め。御。奉。公。を。大。切。に。相。勤。め。様。致。し。た。き。の。あり。と。い。へ。り。又。此。巻。の。輕。口。交。じ。と。決。し。三。編。の。奉。公。の。秘。事。口。傳。ふ。深。く。人。を。得。て。有。る。も。又。本。の。所。く。み。女。の。せ。を。い。ひ。惡。て。い。ひ。た。る。女。の。得。み。せん。が。為。也。又。男。の。執。心。を。除。かん。が。為。也。又。男。が。不。持。故。み。女。の。ま。ろ。く。ある。事。も。ひ。り。男。の。惡。性。と。ま。の。事。の。主。従。

三徳心傳二編

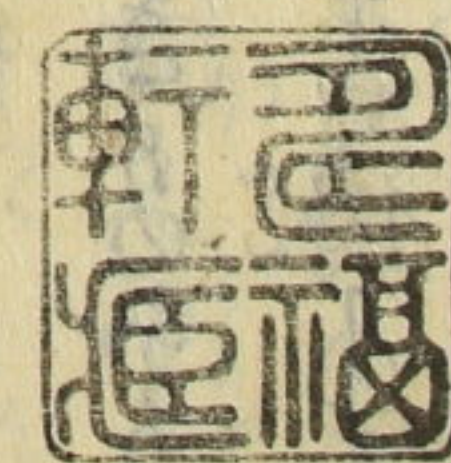
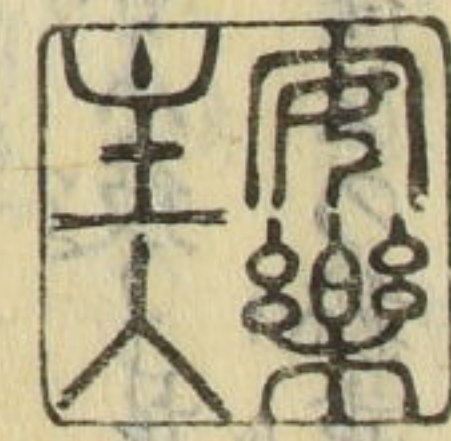
四編を見とあるが、

主從心得草後編 大尾

天保十四年中七月天赦日

東都下谷金杉

安樂寺 真鏡著



日用心法鈔初篇 三冊

同二編 同三編 出板

主從心得草初篇 二冊

同二編 同三編 同

同四編 同三編 出板

日本橋通貳丁目

山城屋佐兵衛

下谷車坂

和泉屋仁三郎

